ユナクレスト

目次

- 【プロローグ：天才少年のカンチョー処刑宣告】
- 【第1章：股裂きと肛門開発の始動】
- 【第2章：感度10,00倍とグリセリン浣腸による便意責め】
- 【第3章：24時間∞強制うんち排便の刑】
- 【第4章：図書室でのカンチョー愛撫と窓辺の公開屈服】
- 【第5章：落とし穴トラップの棒へ肛門から堕ちる】
- 【終章：報告なしではいられない、完成された肛門玩具】

【プロローグ：天才少年にカンチョー処刑宣告】

　空中魔法学園ダイヤモンド・アカデミーの朝は、人工的なマジックライトの光によって明ける。
　長い廊下をクレストは重く沈む自身の胃のあたりを、瑠璃色のケープの上から押さえながら歩いていた。
　学園はじまって以来の天才とうたわれる彼の明晰な頭脳も、今朝ばかりは思考を拒絶し、得体の知れない不安にさらされている。

　昨日、正面玄関にある掲示板に貼り出された「実技演習・対人戦トーナメント表」の対戦予告は瞬く間に全校生徒の知るところとなった。
　彼の対戦相手は学園で最も恐れられ、かつその苛烈で残虐な戦闘スタイルにより（ある種の層から）熱狂的な人気をほこる少女ユナだ。
　トーナメント表に並んだ自分の名前とその隣に刻まれた彼女の名の対比を思い出すたび、クレストの細い腰は恐怖で小刻みに震えた。
　ユナはこの数日で、並み居る屈強な男子生徒たちを次々と「再起不能」に追い込んできた。
　それも単なる力負けではない。
　徹底的な関節技――特に無慈悲な股裂きによって自由を奪い、内転筋が悲鳴を上げて心が折れ、身体が完全に脱力したその瞬間に放たれる容赦なき必殺の「カンチョー」。
　犠牲となった男子たちは一様に白目を剥き膝から崩れ落ち、男性器に触れられることすらないまま肛門への1点攻撃だけで噴水のように射精して果てたという。
　その光景は「学園の地獄絵図」として、彼の耳にも嫌というほど入っている。
　今クレストが穿いているタイトな黒いショートパンツの下で、括約筋が自衛の本能からキュンと固く引き締まった。

「あ、みーつけた。ク・レ・ス・トくん♪」

背後から心臓を直接掴み上げられるような、明るくも残酷な声が響く。
「……ユナ」
振り返るとそこには腰まで届く深い藍色のツインテールを桃色のリボンで揺らし、 不敵な笑みを浮かべたユナが立っていた。
彼女は獲物を品定めするように彼の赤髪と猫耳を指先で弄びながら、至近距離まで顔を近づけてくる。
桃色のブラウスから覗く白い肩口。甘くそれでいて捕食者のような威圧を孕んだ香りが漂っていた。
「来週の試合楽しみだね。君の頭脳が私の『合理的な攻略』にどこまで耐えられるか……」
「言っとくけどボクは負けるつもりはないから。他の男子と同じと思わないで」

学園一番の天才と言われたプライドか、クレストはせめての抵抗と、キッとユナを睨み返した。
彼女の翠色の視線が、彼の細い腰周りと羞恥に震える太ももを舐めるように動く。
その視線が通るだけでクレストの皮膚には粟立ちが走り、尻尾は逃げ場を失ったように激しく揺れた。
「あは。そんなに震えないでよ。大丈夫……優しく……じっくり、おしりの穴の奥まで分からせてあげるから」
「……」
「負けた男子たちはみんな、最後はすっごくいい顔してたよ？ 私のカンチョーで肛門からズンッ！って貫かれた瞬間みんな『ヒギィッ！』って言って、精液をドバドバ全部出しちゃって。クレストはどうかな？ 君のその可愛いおしりが私の指をどれだけ締め付けてくれるか、今からワクワクしちゃう」

「なっ……」

「ふふ」
クレストの脳裏に、自らが演習場で四つん這いにされユナの指にその肛門を蹂躙される最悪のイメージがこびりついて離れない。
あと1週間。この「地獄の宣告」から逃れる術はない。

そして時の流れはあっという間だった。

【第1章：股裂きと肛門開発の始動】

放課後の静まり返った演習場には、荒い呼吸の音だけが響いていた。
「学園の頭脳」とうたわれたクレストは、今や床に跪き脂汗を流しながら目の前に広がる残酷な光景を必死に直視しようとしていた。
周囲にはすでにユナによって徹底的に「攻略」され、尊厳を失って横たわる男子生徒たちの無様な姿がある。
彼らは1人残らず強烈な股裂きによりそのスジはブチ切られ、完全に股が裂け切っていた。

そしてズボンの肛門部はユナの指の形にめり込み、前は白濁した液体で無惨に汚れ、その顔は極限の羞恥と狂おしい快感が混ざり合った、この世のものとは思えない虚脱した表情で固まっていた。

「ねえクレスト。最後はキミだけだよ？」

ユナがにっこりと、無邪気で残酷な笑みを浮かべる。
彼女は自身のしなやかな肉体を包む愛用のブラウスを僅かに翻しながら、捕食者の足取りでゆっくりと間合いを詰めてくる。
その翠色の瞳には知性派であるクレストを徹底的に屈服させその秘部――タイトなパンツに守られた、いまだ未知のおしりの穴を無慈悲に暴きたいという加虐心が、暗い炎となって燃え上がっていた。

「クレストの賢い頭ならもう分かってるよね？ 抵抗しても無駄。なにしても無駄。素直に私に……じっくりカンチョーで開発されちゃいなよ」

ユナが鋭く踏み込む！
彼女の狙いは明確だ。
クレストの華奢な体を地面に組み伏せ、その細い足を強引に左右に割り開くこと。
そこから始まるのは股のスジが悲鳴を上げる地獄の股裂きの序曲に他ならない。

ユナが低く鋭いタックルを仕掛けてきた！
獲物の機動力を奪うための、合理的かつ迅速な一撃。
彼女の両手がクレストの細い腰をガッシリと掴み、そのまま冷たい床に押し倒そうと圧力をかける！

クレストは恐怖で硬直しかける脚を必死に叱咤し、学園で叩き込まれた『生存のための最適解』を熱を帯びた脳内で瞬時に弾き出す。
ユナの突進は鋭く重い。
まともにその圧力を受ければクレストの小柄な体躯はひとたまりもなく粉砕されるだろう。

「……させるもんか……っ！ そんな恥ずかしいこと……ボクがっ……！」

羞恥心に顔を真っ赤に染めながら、クレストはあえて重心を深く落とした。
突っ込んでくるユナの勢いを、逃げるのではなくあえて正面から受け止めるフリをする。
彼を象徴する真紅の猫耳が極度の緊張と興奮でピンと立ち、警戒心も露わに小刻みに震えている。
ユナがクレストの腰に強引に手をかけようとしたその瞬間、クレストは彼女の襟元を掴んで自ら仰向けに倒れ込んだ。

「えっ……！？」

驚愕に翠の目を見開くユナ。
その隙を逃さずクレストは自分の右足を彼女の下腹部にしっかりと当て、背中の回転運動を利用して彼女の重みを頭上へと鮮やかに放り投げた。

クレストの隠し玉、相手の突進力を逆利用した必殺の巴投げだ。最高のタイミングで極まった！

「くっ……」

だが、投げ飛ばされたユナは空中で見事に身を翻し、猫のようなしなやかさで着地する。
しかしクレストもまた彼女に『足を掴ませ股を割らせない』という執念を爆発させていた。
投げた瞬間の慣性を利用して素早く後方へ転がり、再びユナとの距離を確保する。
激しい動きに合わせ彼の細い尻尾がムチのように空を打ち、本能的な防衛本能を物語っていた。

「へぇ……今の悪くないね。自分の弱点を突かれないようにあえてリスクを取って投げてくるなんて」

ユナは着地の衝撃で乱れた藍色の髪をかき上げ、不敵なあるいは悦びに濡れた笑みを浮かべる。
彼女のブラウスの裾から覗く白い腹部が、興奮による激しい呼吸で波打っている。

「でもクレスト。巴投げってことは……一瞬でも君の足が私のすぐ近くにあったってことだよ？ その細い太ももの内側すごく柔らかそうだったね」

ユナの視線が防衛本能で震えるクレストの脚そしてガードを固めている股へと、粘つくように注がれる。
クレストの心臓は早鐘のように胸を突き破らんばかりに打っている。
今の全力の巴投げでスタミナを大きく消耗した。
対するユナはむしろ獲物を追い詰めた興奮によって、その翠の瞳にさらなる活力を宿している。

「次はその『股とお尻を絶対に死守するという心』を、じっくりと解体してあげる……君のおしりの穴が、絶望でヒクヒクと開いちゃうまでね」

ユナが再び姿勢を低くする。
今度は正面からのタックルではない。
クレストの足首を、指先を、執拗に狙う蛇のような不気味な動きで、じわじわと詰め寄ってくる！

クレストは肺を焼くような荒い呼吸を整えながら、学園の理念である「効率的なリソース管理」を、呪文のように脳裏に刻む。
無闇に動けば疲弊したスタミナを浪費し、ユナの思うツボだ。
彼はあえて自分から動まず、底知れぬ加虐心を孕んで低く構えるユナの挙動を、食い入るように見つめた。
一瞬の隙、その力を利用して再び状況を打開するしかない。

「……冷静だね、クレスト。でも、その静止は『詰み』へのカウントダウンだよ？」

ユナが地を蹴った。
彼女はクレストの脚を狙うと見せかけ、凄まじい速度でサイドへと回り込む。
クレストの視界から消えようとするその瞬間、彼女の白く細い指先が、狙い定めたようにクレストの膝裏へと伸ばされた。

「隙あり……♪」

「うわっ！？」

クレストの動揺を見透かしたかのように、ユナの攻撃には巧妙なフェイントが織り交ぜられていた。
クレストは彼女の動きに合わせて必死に身体を捌こうとしたが、ユナの指先がクレストの制服――青いケープの裾に非情にも引っかかる。

「捕まえたっ！」

「なっ！？」

ユナはクレストのバランスが僅かに崩れた瞬間、その「隙」を見逃さなかった。
獲物の背後に電光石火の速さで回り込み、強引にその華奢な身体を冷たい地面へと押し倒す！

ドサッ！！

「うあ……っ！？」
床に叩きつけられた衝撃で、クレストの肺から空気が強制的に漏れ出す。
すかさずユナは抵抗するクレストの背中に馬乗りになり、自らの両脚をクレストの太ももの内側に楔のように割り込ませ、必殺の股裂き責めを強烈なまでに極めた。

「ひぎいいいいいい！？？　ま、股がああああ！？！？」

「巴投げはもう通じないよ。クレストの計算、私がすべて上書きしてあげる。……ほら、逃げられないようにじっくり広げてあげようね」

ユナはクレストの細い両足首を、岩のような握力でがっしりと掴んだ。
そのまま左右に、非情な力任せに、しかし解剖学的な最適解をもって、確実かつ無慈悲に広げ始める。

ミシミシ……ッ！！

「あ……が、あああああッ！？！？ いやだ、やめて……ッ！！　ま、股が裂けるううう！？？」

クレストの股関節にこれまでに経験したことのないような、神経を直接焼くような鋭い痛みが走る。
ユナは苦悶に身をよじるクレストの背中の上に座り込み、じわじわとおもちゃを扱うように

彼の股を引き裂いていく。
　あまりの激痛に、クレストの猫耳が力なく伏せられ恐怖を象徴するように激しく痙攣した。

ブチッ……！

「ぎあああああああああああああああああああああ！？！？？」

　クレストの内転筋がついにヒモが千切れるような音を鳴らし断裂した。
　羞恥心でいっぱいだったクレストの思考は、あまりの激痛と無防備に晒されていく自身の肛門への恐怖で真っ白に染まり始めた。

「ま、股が！？　ボクの股がああ！？？」

「あはは。いい声！ クレストの身体、意外と柔らかいんだね。股のここ、もっと見せてよ」

　ユナは楽しげに、さらに残忍な力を込めてクレストの脚を左右に「V字」の形で固定した。
　クレストはもはや自分の股間が完全に無防備な状態で、恥ずかしいおしりの穴までがユナの翠の瞳に晒されていることを、痛みと屈辱の中で自覚せざるを得なかった。
　彼の尻尾は絶望的に床を叩き、逃げ場のない現実を拒絶するように左右に降られている。

　限界まで股裂きを極められたクレストの耳元で、ユナは甘く残酷な熱い吐息を吹きかける。

「ねえ、クレスト？ 私の股裂き、どう？　股、すっごく痛いでしょ。ほら、おしりの力が抜けちゃってるよ……？ 私にカンチョーされるのを待ってるみたい」

　彼女の白く狡猾な両手の人差し指が、ゆっくりと印を結ぶように組まれた。
　そして羞恥に震えるクレストの、最も無防備で最も鋭敏な肛門へと狙いを定める。

　クレストは股裂きの激痛に顔を歪ませ、脂汗を滝のように流しながらも、持ち前の「論理的思考」を極限までフル回転させた。
　今このまま股を引き裂かれその肛門をユナの指で蹂躙されれば、待っているのは　抗いようのない魂まで破壊されるような屈辱的な敗北のみ。
　彼は震える掠れた声で、ユナの「合理主義」と「サディスティックな加虐心」の両方を同時にくすぐる、悪魔的な取引を必死に持ちかけた。

「……ま、待って……ユナ……っ！ こ、こんなに簡単に終わったら……『訓練』にならないだろ……？ 」

　クレストの声はもはや絶叫の余韻で途切れ途切れだ。
　股関節からは「ミシミシ……ッ！」と、骨と腱が軋む不気味な音が絶え間なく試合場に響いている。

「と、取引……っ！ も、もしも1分間……ボクに自由に……攻撃させて……それでユナを倒せなかったら……っ！ 実戦じゃ絶対に使うヒマのない感度100倍の魔法、おしりへの刺激

を100倍にする魔法をボクにかけていいから……キミの望みのポーズを……なんでも……とってあげるから……っ！」

　その死に物狂いの提案を聞いた瞬間、ユナの指の動きが止まった。

「わ、悪くないだろ。1分なら100倍、2分なら200倍。1分につき100倍の上乗せ！　じょ、上限なしでいいからっ」

「へえ……？」

　彼女の翠の瞳に、好奇心と計算された嗜虐的な愉悦が混ざり合った妖しい光が宿る。

「……1分につき100倍の上乗せ？ 上限なし……？ ふふ、あはははははッ！ さすが学園の頭脳、面白提案を考えるね！」

　ユナはクレストの細い腰をさらに強く跨ぎ、その耳元で熱い吐息と共に囁いた。

「いいよ。乗った！ クレストのその必死な絶望顔、もっと深いところで染めてあげたいしね。……じゃあキリよく『**3**分間』で行こうか。刺激倍率は契約通り**300**倍。もし私が倒れなかったら、クレストは自分の指でその可愛いおしりの穴を広げて、私の指を待っててくれるんだよね？」

　ユナはゆっくりと、勝利を確信した余裕で拘束を解き、クレストを床に転がした。
　彼女は余裕たっぷりになんの構えもとらないまま、クレストの目の前で両手を広げて立ち尽くす。
　桃色のブラウスから覗くデコルテが、勝利への優越感に震えている。

「さあ3分間のカウントダウン、スタートだよ。……私を倒せなかったら、魔法で感度を極限まで跳ね上げられた君の身体が、どうなっちゃうか……今から楽しみだね？」

　クレストの白濁しかけた瞳に一瞬だけ、鋭い「合理性」の光が宿った。

「……3分……分かった。……これがボクの出した『最適解』だ」

　クレストは悲鳴を上げる股関節を必死に叱咤し這いずるようにして立ち上がる。
　ユナは余裕たっぷりにどんな高等魔導による攻撃が来るのかと胸を弾ませ、無防備にその身を晒していた。
　しかし次の瞬間、クレストの取った行動は「攻撃」ではなかった。
　クレストは全魔力を自身の細い足に集中させると、爆発的な勢いで演習場の出口へと背を向け、全力でなりふり構わず脱兎のごとく逃げ出したのだ！

「えっ……？ あ、ちょっと！ クレスト！？」

　背後から呆然としたユナの驚愕の声が響く。

　勝てないとわかったなら逃げるしかない。みんなの前でカンチョーでイカされるなんて耐えられない。

「……ふふ、あはははは！ やっぱりクレストは最高だよ！ その往生際の悪さ、ますます泣かせたくなっちゃった！」

逃げようとしたクレストの背後に、凄まじい風圧が迫る。
ユナは「攻撃（反撃）」はしていない。
ただ逃げる獲物を全力で「追跡」し始めただけだ。
前衛騎士としての圧倒的な脚力は、満身創痍のクレストを逃がすほど甘いものではなかった。

ガシッ！！

「ひっ……！？！？ いやだ……っ！！」

演習場の出口まであと数メートルというところで、クレストの細い足首を、ユナの強靭な手が掴んだ。
そのまま無慈悲な力任せに引き戻され、クレストは再び床に叩きつけられる。

「はい3分経過。……1発も攻撃してこなかったね？ ってことは、クレストの完全敗北」

ユナが逃げようとしたクレストの背中に、再び馬乗りになる。
その顔は先ほどよりもずっと深く、暗い加虐の悦びに濡れていた。

「約束通り『刺激**300**倍の魔法』かけてあげる。それから……私の望んだ最高に恥ずかしいポーズで、トドメを刺してあげるね。キミの肛門が300倍の快感でどうなっちゃうか楽しみだよ」

ユナの手がクレストの震えるおしりの穴へと伸びる。
逃走に失敗した絶望とこれから訪れる「300倍」という狂気の恐怖に、クレストの思考は完全に停止した。

「せ、1000倍でいいから！　もういっかい逃がして……」

「あはははっ！ クレスト、君って本当に……最高に合理的で最高に無様だよ！」

ユナはクレストの背中の上で、おなかを抱えて爆笑した。
「学園の頭脳」とまで謳われた誇り高い少年がプライドも論理もすべてかなぐり捨てて、「1000倍」という生物の限界を超えた倍率を自ら提示し、彼の猫耳を激しくぴくつかせながら涙を流して命乞いをする。
その屈辱に満ちた姿は捕食者である彼女にとって、血の滴るステーキよりも甘美なご馳走であった。

「いいよ、その取引乗った！ 1000倍だね？ 約束だよ？ その代わり今回は先に1000倍の魔法かけるからね？」

ユナはパチンっと指を鳴らす。

「ん……？」

特になにか変わった様子はない。

「安心していいよ。無条件で感覚1000倍なんてやったら敏感すぎて走れなくなっちゃうからね。これは遅延系でカンチョーの瞬間に効果でるようにしといたよ。……でももう逃げ道なんてどこにもないんだからっ！」

ユナはわざとらしくパッと手を離し、クレストの細い腰から立ち上がった。
一瞬の解放。
しかしそれが更なる絶望への入り口であることに、恐怖で思考の鈍ったクレストはまだ気づいていなかった。
股裂きのダメージで足は思うように動かず、クレストは震える手で冷たい床を這い、1歩、また1歩と出口への距離を縮めようと足掻く。
無様に引きずられる尻尾が、彼の失われた尊厳を象徴していた。

（逃げなきゃ……。また捕まったら……1000倍……そんなの……っ！）

四つん這いになり、無様にそれでも必死に這いずるクレスト。
その結果、彼の背後では最も無防備で最も鋭敏なおしりの穴がユナの視線に対してこれ以上なく「突き出された」状態となってしまった。
ユナはそれを見下ろし、獲物を仕留める直前の獣のような、鋭い歓喜をその翠の瞳に宿した。

「……なーんてね。『相手に少しでもスキがあると、即座に必殺のカンチョーをぶちこむ』。これが私の最適解なんだよ、クレスト！」

逃げようと四つん這いになり、無防備に突き出されたクレストの尻。ユナは逃走を許すどころか、その瞬間を待っていた。彼女は両手の人差し指をガッチリと組み、全魔力を指先に集中させる。

「いっくよぉ……『カンチョー！！』」

ズボォッ！！

「おふぅぅっ！？？！？」

クレストは最初、自分の肛門が爆発したのかと思った。自然と「おふぅ」などと言う声が絞り出されるように喉から勝手に出た。
熱い熱い指が、肛門から一気に根本まで入り込んだ。生まれて初めて肛門に下着と指をブチこまれたクレストには、それがなんなのか、すぐには分からなかった。
ズボッなどという鈍い貫通音と共に、ユナの指先がクレストのおしりの中央からおしり、肛門と直撃したのだ。衝撃はおしりを突き抜け、おなかの奥底まで一気に駆け抜けた。
1000倍に跳ね上がった感度により、本来なら痛みであるはずの衝撃が、脳が焼き切れるほどの狂おしい快感になっていく。

「あ、が……あ……ぁ……っ！！」

クレストは白目を剥き、全身を弓なりに反らせました。指が肛門を貫通し直撃した前立腺が、1000倍の感度で激しくのたうち回り、脊髄を伝って脳を快楽の濁流で塗りつぶしていきます。

運命の10カウント

ユナはクレストの逃げ場のない肛門に指を深々と突き刺したまま、彼の反応を一切の慈悲なく愉しむようにカウントを刻み始めた。
1000倍に跳ね上げられた感度は彼女が唇を動かすわずかな空気の微動さえも、クレストの脳髄を直接電撃で焼くような、狂おしい快感に感じらさせられる。

「10……じっくり可愛がってあげる。」
「9……見てよクレスト、おなかの形が変わるくらい私の指が入ってるよ？」
「8……」

ユナが指先を「ぐぷり」と押し込む。1000倍の感度は、そのわずかな進攻をおなかの内側から抉り取られるような激痛と、それを上書きする真っ白い快感に変えていく。

「7……すごい、1000倍の魔法のせいで粘膜が熱い鉄みたいにドロドロだよ……」
「6……」

クレストの喉がひきつり、声にならない悲鳴が空気を震わせる。指が内壁を擦るたび、彼の脊髄を通り越して脳天まで痺れが突き抜ける。

「5……ふふ、クレストのここ、ピクピク震えて……今にも弾けちゃいそうだね」

クレストの視界は一瞬で真っ白になり口からはよだれが垂れ、思考は「おしりが、肛門の中が気持ちいい」という1点だけに支配されていく。
必死に立てていた理性の防壁はユナが指を「ぐりっ……！」と内部で回転させるたび、数万本の灼けた針でかき乱されるような快感の濁流に飲み込まれドロドロに溶け出していた。
クレストの猫耳はもはや制御を失って激しくピクピクと動き、長くしなやかな尻尾は床を無意味に叩いて、絶望的な拒絶と微かな期待を交互に露わにしている。

「4……」

「あ、あ゛、あ゛あぁあああ……っ！！」

ユナの指先はもはや彼に逃げ場を許さない。

「3……漏れちゃってるよ、クレスト。お口からも、お尻からも……。汚いね、でも可愛いよ？」

「2……」

　ユナの指が、最も過敏になった肛門を「トクン、トクン」と魔法の脈動で叩く。クレストはもはや痙攣することしかできず、ただ終わりを、あるいはさらなる破壊を待つだけだった。

「1……」

　最後の一押し。

ぐぐぐぐっっ!!

　ユナの指がさらに奥へと根元まで埋まり……。

『ゼロ』。……おしまい！」

絶頂、そして終局

　10カウントと同時に、クレストの小さな性器から熱い奔流が爆発的に噴き出した。

「あ……あああああああああああああああッ！！！！」

　男性器を1度も触られることなく、ただおしりへの1点攻撃だけで、彼はこれまでの人生で味わったことのない、意識が遠のくほどの射精を強制されたのである。
　あまりの刺激に背骨が三日月のように弓なりに反り返り、髪を汗で濡らしながら、クレストは魂を吐き出すような絶叫を上げ続けた。

「……すごい。ねえ、クレスト？ 君の肛門、信じられないくらいぎゅうぎゅうに締まってるよ。射精時肛門律動っていうんだよ。私の指を噛みちぎろうとしてるみたい……っ！」

　ユナは恍惚とした表情で、クレストの内部の収縮を指先でじっくりと堪能した。
　勝利の熱気で微妙に揺れる桃色のオフショルダー・ブラウスから覗く白い肩元には捕食者の香りが漂っている。
　そして、クレストの身体が快感の余韻でガクガクと震え、完全に脱力したのを見計らって――。

ズポォッ！！！

「ひ、あうっ……ぅ、あああああ……っ！！」

　勢いよく指を抜き去ると、クレストは力なく床に崩れ落ち、獣のような、あるいは壊れた楽器のような艶めかしい声を漏らして悶絶した。

「くんくん……」

　ユナはクレストの肛門から引き抜いた指の匂いを嗅ぐ。

「クレストのうんちの匂い、するね……」

「あぐ……にお…い.....」

肛門がじんじんと気持ち良く痺れるカンチョー余韻に浸るクレスト。
これがこの後の5000倍、そして10000倍……さらなる地獄の序曲に過ぎないことも知らず、彼はただ、失われた尊厳の欠片を拾い集めるように、荒い吐息を繰り返すことしかできなかった。

「お疲れ様、クレスト。君の負けだよ。……さあ、次はどんな『ポーズ』で可愛がってほしい？」

夕暮れの演習場に、ユナの明るく、そして残酷な笑い声だけが冷たい静寂を切り裂いて響き渡った。

クレストは白目を剥き、指を抜かれた余韻でビクビクと身体を跳ねさせていましたが、ユナの怒りと愉悦は収まりません。

「逃げようとした上に、1000倍なんてハッタリまでかまして……。クレスト、君の考えた作戦はね、私の加虐心に完全に火をつけちゃったよ。お仕置き、たっぷりと受けてもらうからね」

ユナは虚脱状態のクレストの細い足を掴んで再び引きずり戻すと、抵抗できない彼の身体に、学園の禁忌に近い「重層魔法」を次々と刻み込んでいきました。

重層お仕置き魔法：十連鎖（デカ・チェイン）

1. 【強制排尿誘発】：膀胱を直接刺激し、失禁の屈辱を永続させる。
2. 【括約筋不全】：おしりの締まりを強制的に緩め、常に異物を受け入れやすい状態に固定する。
3. 【粘膜超過敏】：直腸内の粘膜を、そよ風すら激痛と快感に変えるほど過敏にする。
4. 【羞恥心増幅】：理性だけを鮮明に残し、受けている屈辱を10倍濃く認識させる。
5. 【魔力強制循環】：クレストの魔力を全て「性感」に変え続け、スタミナ切れを許さない。
6. 【発汗（媚薬成分入り）】：自分の汗さえも自分を興奮させる毒に変える。
7. 【感覚共有】：ユナがクレストの肌に触れた「楽しさ」が、クレストには「暴力的快感」として伝わる。
8. 【時間感覚伸長】：1秒の絶頂を、脳内で1分間に引き延ばす。
9. 【絶頂禁止（寸止め）】：ユナが許すまで、射精の瞬間の苦しさを維持し続ける。
10. 【感度**5000**倍】：全ての魔法の基盤。指1本の接触が、核爆発級の快楽へと変貌する。

奈落の絶頂

「ひ、あ……あがっ、あああああッ！！」

魔法が完成した瞬間、クレストの世界は一変しました。床に触れる制服の布地すら、数千本の針でおしりをかき回されているような狂おしい刺激に変わります。

「ねえ、見て。感度5000倍だよ？ 今のクレストなら、私の吐息がかかるだけで……ほら」
　ユナがクレストの耳元で「ふぅ」と息を吹きかけると、クレストは「ヒィイッ！」と悲鳴を上げ、全身の筋繊維が千切れるほど硬直しました。

ビキビキッ……！

肉体の軋む音が、静まり返った演習場に虚しく響きます。

「さあ、お仕置きの仕上げ。次は逃げられないように、私が一番好きなポーズで固定してあげる。……おしりを高く突き出して、自分の手で広げて。ほら、早くしないと10000倍に増やすよ？」

　クレストは涙とよだれで顔をぐちゃぐちゃにしながら、5000倍の感度に震える指で、自らの猫耳を激しくピクつかせ、羞恥に悶えながら自らのおしりを割り開きました。

「あはは、いい子！ じゃあ、今度は指じゃなくて……これ、使ってみようか？」

　ユナが取り出したのは訓練用の硬質な魔導杖。
　それがクレストの肛門に突き立てられるのを想像し、クレストはあまりの恐怖と期待、そして5000倍の快感の濁流に、その紫色の瞳を潤ませながら、意識を完全に「攻略」されていくのでした。

クレストの「完全敗北」と「肉体開発」の記録

「……ふふ、でもやっぱりクレストのその可愛いおしりには、私の指が一番お似合いだよね」

ぽいっ。

　ユナは魔導杖を放り投げ、再び両手の人差し指を固く、隙間なく組み上げました。
　感度5000倍という、生物の限界を遥かに超越した魔法をかけられたクレストにとって、その指が近づいてくるだけで全身の毛穴が逆立ち、内臓がせり上がるような狂おしい予感に襲われます。

「ひ、あ……あ、あああああッ！ いや……カンチョーだけは、カンチョーだけはもうダメえぇっ！！」

　クレストは自分の指でおしりを広げさせられたまま、涙とよだれで顔をぐちゃぐちゃにして首を振ります。
　しかし逃走を試みた「卑怯な少年」への報いは情け容赦なく執行されるのです。

究極の執行：感度**5000**倍の「カンチョー」

　ユナが鋭く踏み込み、クレストの最も無防備な肛門へ、全魔力を込めた指先を突き立てます！

「逃げようとしたお仕置きだよ……『カンチョー！！』」

ズボォオッ！！！

「はふぃいぃいいいいいいいいいいいいいいいッ！？！？！？！？！？！？！？！？」

　クレストの絶叫が演習場の天井を突き抜けました。
　指が侵入した瞬間、「ズボッ！」という重い衝撃がおなかの深くまで走り抜け、 5000倍の感度がその衝撃を「魂を焼き切るほどの快楽」へと一瞬で叩きつけられる。

　あまりの衝撃に、クレストの背骨が「ミシミシ……ッ！！」と悲鳴を上げ、弓なりに反り返りました。
　指先が直撃した前立腺はもはや形を保てないほど激しく震え、クレストの脳内を真っ白な快楽の濁流で埋め尽くしていきます。

悶絶の10カウント

　ユナは突き刺した指をさらに深くねじ込み、クレストの内部が5000倍の魔法でドロドロに溶けていく感触を楽しみながらカウントを始めます。

- **10……**「さあ、逃げたお仕置き。たっぷりと『教育』してあげるね……」
- **9……**「あ、あがっ……がはぁっ……！！」クレストは言葉にならない悲鳴を上げ、白目を剥いて痙攣します。
- **8……**指が直撃した肛門から、5000倍に増幅された「熱」が雷のように全身の神経を焼き尽くす。クレストの視界は真っ白に染まり、思考することさえ快楽の暴力によって許されない。
- **7……**「すごいよクレスト、おなかの皮が私の指の形に盛り上がってる……っ！ これが5000倍の反応なんだね！」
- **6……**クレストの喉から、ひゅーひゅーと情けない空気の漏れる音が漏れる。括約筋は完全に無力化され、ユナの指を締め付けることさえできず、ただ蹂躙されるがままに震える。
- **5……** 指先が粘膜を抉るたび、クレストの腰がガクガクと砕けたように跳ね、溢れ出す蜜で指が滑ります。
- **4……**「ひ、ぎいっ、ぁあああぁあああああ……っ！！」もはや咆哮。5000倍の感度は、指の表面のわずかな凹凸さえも牙のように感じさせ、クレストの内部をズタズタに掻き回していく。
- **3……**「見て、クレストのここ……もう限界を超えて、爆発しそうだよ？」
- **2……**意識の断片が、快楽の濁流に飲み込まれて消えていく。自分かユナかも分からない。ただ、この魔法の指がもたらす地獄のような悦びだけが、この世界の全てになる。
- **1……**

「……ゼロ！ 卑怯なクレスト、たっぷり『おしおき』してあげるね！」

終焉：**5000**倍の絶頂

ブシャアアアアアアアアアアアアアッッッ！！！！

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああああッ！！！！」

クレストの股から、かつてないほどの熱い奔流が爆発的に噴き出した。
まずは精液が吹き出し、射精が終わると尿が吹き出し、そして尿が終わるとまた精液が噴出した。
5000倍の感度によって引き出された絶頂は、1秒が1分に感じられる魔法の効果も相まって、永遠に続くかのような極限の快楽となって彼を襲った。

「……はぁ、はぁ……っ！ すごい……クレストの肛門、私の指を飲み込もうとして、すごい力でヒクヒク収縮してる**……**っ！ 1000倍の時よりずっと、ずっと熱くて締め付けが強いよ……！」

ユナは恍惚とした表情で、クレストの内部が絶頂の余韻で波打つのを指先でじっくりと堪能した。
そして、クレストがもはや指1本動かせないほどに果て、魂が抜け出したようになったその瞬間――。

ズポォォォォンッ！！！

「ひぃ、いいいぃぃいいいいいいいっ……！！！」

勢いよく指を抜くと、クレストは壊れた人形のように床に崩れ落ち、喉の奥からひきつったような喘ぎ声を漏らし続けた。

「あはは！ 逃げようとした罰、しっかり受けてくれたね。……さあ、次は10000倍で試してみようか？」

崩れ落ちたクレストの耳元で、ユナの明るく残酷な声が、次の「教育」を告げるのだった。

クレストはユナの所有物（おもちゃ）として完全に『最適化』されました。

「クレスト、キミがさっき『上限なしでいい』って言ったんだよ？ 忘れてないよね？」

ユナの瞳には理論を越えた狂気的な愉悦が宿っていた。
彼女は震えるクレストの細い腰をさらに強く抑え込み、逃げ道を完全に塞ぐ。
5000倍という未踏の快感に脳を焼られ、涎を垂らして喘ぐクレストの耳元で、彼女は死刑宣告にも等しい追加魔法を編み上げた。

「上限なし……。じゃあ、約束通り『感度**10000**倍カンチョー』で行こうか。クレストのその可愛いおしりが、どれだけメチャクチャになっちゃうか試してみようね」

クレストの全身が恐怖でガタガタと震える。
10000倍という倍率はもはや存在そのものが快楽という暴力によって消滅しかねない数値。
彼は「ひ、ぃ……あ……っ」と声にならない悲鳴を上げるが、ユナは容赦なく両手の人差し指で印を組み、全魔力をその1点に集束させた。

【第2章：感度10,000倍とグリセリン浣腸による便意責め】

「いくよ……逃げようとした悪い子への、本当のトドメ。『カンチョー！！』」

ズボォッ！！！

「ぎぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃっ！？！？！？！？！？」

指が侵入した瞬間、世界が弾けた。
「ズボッ！」という衝撃波が、**10000**倍の感度によってクレストの神経を**1**本残らず焼き尽くすような超絶的な快感へと変貌する。
クレストのおなかの奥底まで衝撃が走り抜け、彼の華奢な身体は限界を超えて反り返り、「ミシミシ……ッ！！」と骨と筋肉が悲鳴を上げる音が室内に響き渡りました。

絶望の**10**カウント（**1**ずつ刻まれる永劫）

ユナは指を突き刺したまま、逃げ場のないクレストの内部を蹂躙しながら、ゆっくりと、残酷にカウントを刻み始める。

- 「**10……**」「あ、あガっ……！！」クレストの眼球が上を向き、白目を剥いて激しく痙攣していく。
- 「**9……**」感度10000倍の粘膜を指が抉るたび、クレストは喉を潰したような悲鳴を漏らしている。
- 「**8……**」「ねえ、クレストの肛門、熱すぎて私の指が溶けちゃいそうだよ」
- 「**7……**」指先が前立腺を直撃し、そこから脊髄を通って脳に「快楽の落雷」が落ち続ける。
- 「**6……**」羞恥心が強いはずのクレストが、あまりの快感に無様に腰を振り、ユナのカンチョー指を求めてしまう。
- 「**5……**」「あはは、自分から締め付けてきちゃって。卑怯なのに、身体は正直なんだね？」
- 「**4……**」クレストの股からは触れられてもいないのに先走りが止めどなく溢れ、床を汚していく。
- 「**3……**」意識が遠のき、クレストの精神は真っ白な光の海へと溶け出していく。
- 「**2……**」1秒が1分に感じられる魔法の効果で、絶頂寸前の地獄が永遠のように引き延ばされる。
- 「**1……**」「さあ、クレストの全部……壊してあげる」

ゼロの瞬間：グリセリン爆発

「『ゼロ』！！」

　その瞬間、突き刺さったユナの指先から、高粘度の魔導グリセリンが爆発的な勢いで発射された。